
ALONE ~ とある少女の話 ~

S.c

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ALONE ～とある少女の話～

【Nコード】

N5098M

【作者名】

S・C

【あらすじ】

悲嘆にくれる少年。

死んだ少女。

それを取り巻く、仲間たち。

……彼らは何を求めていたのか。そして、一人の人間に対する、つながりとは。

(前書き)

喪失感八補填サレタ

ロボット工学三原則

* 第一条 ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。

* 第二条 ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならない。ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限りでない。

* 第三条 ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない。

- - 2058年の「ロボット工学ハンドブック」第56版
『われはロボット』より。

技術発展によるロボット工学三原則への追記

* 第四条 ロボットもしくはプログラムによって構成されたAIは自己の複製をしてはならない（アンドロイドなどに自己の意識を複製することも同様とする）

- - 2093年の世界ロボット工学学会 Saki・Kの発言より原則に追記。

「イエーイ、特殊部隊御用達の星間クルーザーだぜ。しかも長旅に強い人類待望の物質合成装置つき」

今まで働いてきた金を全て使った夢の自分用の船。

「それは、それは良かったわね」

「なんかノリ悪いな」

「別に嬉しくなんかないもの、仕事がたまっているというのに何故そんな能天気でいられるのかしら？ 頭の中力チ割ったら大豆由来の味噌が入ってるんじゃないの？」

三條弥生。俺の部下にして至高の存在、今年で17となる。雪のように白い肌と冬の夜空のように黒い髪、季節に例えるなら『冬』。極寒のシベリアが場所としては似合い、冬に自販機から出てきたつめたゝいのコーヒーが物としてはキャラが被る。

「社長、三條副社長のいう通りではないでしょうか？ 納期は世界標準時で明日なんですよ！ ちよつとは焦ってください！」

「まあ、焦るなつて」

「焦ってください」

高校での後輩に当たる相坂誠、語る必要も無いだろうそれだけだ。なおも後輩は続ける。

「三條さん、何か言ってくださいよ。先輩は三條さんじゃなきゃ、動かないって言ってますし」

言っていないぞ、そんなこと。

「面倒くさい。自分で解決しろ」

「そんなあ」

日はすっかり西に傾き、部室は真つ赤に染まっている。ちよつど完全下校時間を告げるチャイムが鳴る。

「まっ、今日は帰りますか」

独り言のように僕はつぶやいて帰宅準備を始める。

「えっ？ もう帰っちゃうんですか？ まだすべてのプログラムが完成していませんよ。今日は徹夜覚悟で夜食まで用意したんですけど……」

「あたしも帰る……」

「えっ、いや、ちょっと待つ」

冬は日が落ちるのも早い、したがって仕事が出来る時間、つまり部活の活動時間も減る。このままでは納期に絶対間に合わないことは分かっていた。分かっているさつさと帰る。

「いいの？」

下校途中三条が尋ねてくる。空はすっかり暗く、息をめいいっぱい吸い込むと自分も解けてしまうのではないかと思うような澄み切った空気だった。

「なにが？」

「あんたも分かってるんでしょ？ 本当にピンチよ、今日中に完成するの？ なんなら半分持つてあげてもいいけど」

あいつがいなくなってから、どうも仕事がかどらない。あいつは天才だったからな、僕もあいつに憧れてプログラマーを始めたらいいだし、何をやっていたのかは今でも理解できていないが確か部屋にまだパソコンは置いたままのはずだ。

『コーイチー、こんなのどう？ まだ試作段階なんだけど』

『どれどれ……すまんまったく分かん』

『えっ！ なんでこの部分が画期的だと思ったんだけど』

『いや、そう言われても全く分からん』

『コーイチってじつはアホ？』

『……………』

「ちょっと聞いてる？」

「ああ聞いてたよ。いいよ自分の分だ、一人でする」

全くはかどらなかったけどな。

「どうするんですか？ 今からじゃ絶対に間に合いませんよ、先輩」

「すまん」

この頃いつもこうだ。すんだことをうじうじと全く自分が情けなくなる。あいつは死んだんだよ、もう二度と会えない。自分でも分かっていないはずなのにキーボードに向かうと、モニターを熱心に見つめていたあいつの後姿ばかりが思い出される。

「しょうがないわ、出来るところまでやりましょう。先方には必死に謝れば何とかなるわよ」

落ち込みながらパソコンの電源を入れる。あれっ、おかしい。黒い画面でとまったままだ、しかたなく電源を切ろうとするが切れない。

「切っちゃだめだよ、コーイチ」

どこからともなく響く声。それは明らかにあいつだった。

「サキっ、どこにいるんだサキ」

僕とほかの二人も立ち上がって、あちらこちらを見渡す。三条が取り乱し、誠がより一層平静を失っている。

「三条、誠……聞いたよな。サキの声」

「ああ、確かに聞こえた。だが、いたずらにしてはたちが悪いな」

「僕には早紀さんの声はわかりませんが、三条さんに同意です」

非情な言葉だと僕は思った。一瞬抱いた淡い希望が消える。

「なんだよ、これがいたずらだとか言うのかよ」

「そうだよ浩一、早紀は死んだでしょう。きつとどこかに隠しマイクがある。あんたが早紀の死のショックから立ち直れていないことをいいことに早紀の声の音声を使うかして弄んでるのよ!」

激怒。

阿修羅のごとき強い怒りだった、覇気がこちらにも伝わってくる。いつも冷静沈着な三条が怒っている。確かにもし悪戯だとしたら、それは僕だけでなく彼女の気持ちも踏みにじる行為だ。断じて許すことは出来ない。

ここで一つ案が浮かんだ。サキしか分からないことを聞けばいいんじゃないかって。

「なあ、三条。このサキにプライベートなこと聞いてみようかと思うんだけど何を聞けばいいと思う」

「3サイズを聞いたら？」

さっき取り乱したことを反省するような小さい声。

「じゃあ、3サイズ上から言ってみるよ、サキ」

「いえるか、あほー。幼馴染とはいえ聞いていいことと悪いことがあるでしょ」

また、上から声が降ってきた。サキだ、サキにしか思えない。

「私が死んだ、死んでないとか言ってるみたいだけど……そう確かに私は死んだわ、一年前にね。私はサキの意識のコピーみたいなものの、自分でもよく分かんないけど」

確か一年前、サキは病床でも自分のパソコンを使ってプログラムを組んでいた。あれは遺書と同時に自分の足跡を残すための行為だったんだな。

『なにやってんだよ、もう寝とけよ。もうそんなことしてなくていいから』

『”そんなこと”なんかじゃない!!』

彼女にしては珍しく声を荒げた。そのあとすぐに謝ってたけどそういうことだったのか、サキ。

みずくさいぜ……

「あたしはまだ信じてないからね。早紀の意識？ あほらしい」

「やめろよ」

「いいえまだよ、あの子は天才だったのよ。わかる？ つまり週刊誌やら月刊誌やらの取材を受けていたの。もし彼女の3サイズがすらすらと出てきたとしてもは怪しいとも思わないし驚きもしないわ。これだけは言っておくけど、絶対にあんたを早紀と認めないから」

そこまで言うだけ言ったのか三条は口をつぐんだ。

「……だそうだしサキの意識さん、僕も確かに信じられない。確固たる証拠がないというのも事実だ。けど僕は君を信じてみようと思うけど良いだろうか」

少し考えるような時間を置いてサキの意識は答える。

「コーイチがそう言うのだったら仕方ないかな、ちよつと不満だけど……そうだ！ 何かして欲しいことない？ とはいってもここからアドバイスしか出来ないけどいいかな」

えへつと笑った気がした、近くにいた気がした、僕はそれだけで満足だと思った。

次の日、補習だった僕は随分遅れて部室を訪ねた。

「昨日はひやひやでしたよ、先輩。早紀先輩（意識だけ）がなかったらどうしたんですか？」

「土下座でも何でもして納期を一日でも伸ばしてくださいって言い行つてたな、っていうかお前は既にこの天の声をサキと見なしているのか？」

「そう言われても僕は早紀さんのことを話してしか聞いていませんし、自分で名乗っているならそれでいいと思つて」

「そうだよー、いつになったら認めるの？ コーイチ」

天の声が狭い技術部部室に響く、狭いといってもパソコンと四人（内一人はスペースをとらない）が入るにはまあ十分といったところだ。

二年前の四月、僕とサキはT校に入つてすぐ技術部に入つた（技術が云々よりとりあえずパソコンがあつてインターネットに繋がれ

はどこに入ってもよかったのだ)。そして、高校に入ってからサキの友人とサキと僕で株式会社を設立した。

21世紀という言葉自体が使われる年もカウントダウンされていき、22世紀は技術はこう進歩していくだろうなんて今から予想している専門家もいる、今日このごろなのだが。ひいおじいちゃんが生きてたころも21世紀の社会の変化についての予想もあったらしい。今の自分にあてはまるのは、僕みたいな中高生がIT（死語だ）系の会社の社長になっっているだろうということだ。もちろんそれは簡単なことではない。飛びぬけた才能とその会社独自に出来ることが無いと生き残ることは出来ない、社会の条理とはそういうものだ。しかし、僕達には飛びぬけた才能があった。彼女は中学で次世代コンピューターの基礎理論を提唱し、卒業と同時に世界中からオファーがかかったが何故かそれを全て断り公立のT高校を受験し、合格、入学した。当然、世界中の落胆は大きく、『なんとか彼女に仕事をしてほしい』という思いから『気が向いたときに仕事をすればいい、仕事に納期は設けないから』と言うありがたい言葉と多額の援助をしてくれるという人まで現れた。ここまでされると引くに引けず、これが少数精鋭のちっぽけな会社を始めることになったいきさつだ。

「あたしは絶対認めないからな！」

三条もそんなことをいってるが本心じゃないはずだ。昨日だって、疑いながらもサキからの久しぶりの手ほどきを楽しんでいるようにも見えた。

僕たちの会社が請け負っているのはサキの提唱した次世代コンピュータ『ALONE』の基となる新OSの作成だ。そんな仕事ほかに出来る会社、もしくは研究機関があるだろう、という叱責が飛んできそうだがこれは人手だけでは解決できない、どうも開発者の意識（サキの意識）によって微妙なコントロールがされているらしく。深く親交のあったものしか心情の変化が掴めず、機能しない（平たく言うとサボル）らしい。基本的な原理を組んだのは開発者だ

からそいつに聞いてくれ。

「そりゃ、当たり前でしょう。あたしはこう見えて一筋縄ではないかない女なんですよ」

「そんなお前の気まぐれに全世界のプログラマーが困惑してるんだろ！」

即、ツツコミを入れる僕。けど本心ではそうじゃない絶対に幼馴染の心をほかの奴には覗かれたくない、そういう観点からして逆にそれは僕にとっては利点だった。

「っていうかお前がサキなんだったらこの新OSの開発、全部やって欲しいのだが。自分のことは自分が一番よくわかっているはずだろ？」

「だめ、自分でしなきゃ。私一人で使うんだったらいいけどそれが世界標準になるんだったら、私じゃないほかの誰かに使ってもらわないと。だいたい、アホウのコーイチがわかるんだったら他のみんなにもわかるものになるし一石二鳥！！ ヒヤッホー」

「ヒヤッホウじゃねーよ、この能天気がつ」

「ヒヤッホウじゃないよヒヤッホーだよ」

「そんなところが能天気なんだよ！」

聞こえてくる声はスピーカーがどうも音が悪いようでサキのホワホワした声がより一層ホワホワしているようだった。これではもうマヌケだ。

「早紀……の意識聞きたいことがあるんだが」

あわてて言い直す三条の慌てぶりにも、またすごい既視感が生じてくる。まるで一年前みたいだ。

「どこどこ」

「あのさ、ここの変数の設定範囲なんだが……」

「ほへーここは200から350までで調整してみて、もしそれで駄目だったらまた聞いて」

やっぱり、どうも気が抜ける応答だな。それでいて指示は的確で正確無比な答えがすぐに返ってくるような奴なのだ。死んでも頭が

上がらないサキには（すでに死んでる奴に向かって『死んでも』は洒落にもならないが）。

モニターに向かうこと一時間半。時刻は五時、まだ半分活動時間がある。

「じゃっ、今日は仕事も一段落着いたしもう帰るわ」

「先輩、僕もお先に失礼します」

「ちよと待つて抜け駆けは許さ」

「あとはよろしく」「よろしく願います」

有無を言わさない勢い。そこらの押し売りよりも強引な手口で押し付けられた。ちなみに押し付けられたのは『サキ（の意識）』。

「えっと」

「先に帰ってもらったの」

さつきとは違う落ち着いた声で話し出す。

「久しぶりに一対一で話したかったから……別に聞かれて困るような話じゃないけどやっぱりコーイチと面と向かって話したかったから帰ってもらった」

面というのはどこなのだろうと部屋中を見渡すがそれらしきものは見当たらない、まさか頭だけで現れたりはいしないだろうな。

「んーっと、『面と向かって』っていうのは私が言うとジョークになるのかな？ そうじゃなくて真剣にっていう意味で受け取って」

少し困ったような、苦笑いのような。

「私が目覚めたのはちょうど昨日なの。何故か私の視点は三人称みたいになっててみんなの動きがよく見えたわ。最初自分が何故こんなことになってるのか分かんなかったけど、時間が経つうちに私は『私』が仕掛けたAIだつて気がついたの。さっすが私って自分で思ったわちゃんと自我もあるし、生前の記憶もほとんど遜色なく残っているから冷静に自己分析することが出来た。それで一番最後にここを訪ねた記憶を掘り返してみたらコーイチのいつも使っていたパソコンに起動プログラムを仕込んでいったみたいだったから、止

めようとして……」

「そしたら声も出たってこと？」

「そう、完璧に発声が出来る私専用のボーカロイド。自分でも惚れ惚れするわ、このままカラオケでも行く？ 絶対に勝てる自信があるよ！」

「いやまだ、その自信はどこから来る。お前はかなりの音痴だろう？ 本人のリズム感覚は一緒なんじゃないか？ だとしたら止める、お前の歌はバラードがアニソンになるからな」

演歌を歌わせたらオペラになるのではないか？ なんてな。

「123番、T校技術部、神原早紀、歌います!!」

「やめい！」

期待通りの騒音を撒き散らせてくれた能天気はこれまたノータンキに対して、僕は吐息を漏らすほかなかった。

二年前 世界ロボット工学学会

「……………ここまでの人類の技術発展から、これより地球上全てに存在することになるであろうAI、人工意識の長期における権限の掌握を防ぐ目的を含め、生物の終息点『死』の概念をロボットにも付加させることを提唱します」

流暢な英語で発表を終えた少女は深々と礼をして壇上を降りた。
パチパチパチパチパチ

拍手喝采、満員御礼の会場は拍手とそれに負けない「ブラボー」の声に包まれる。

2093年、再生医療と抗老化医療が発達し人類全体の平均寿命

が100年を超えようかという現代。それに伴う圧倒的な人口の爆発、その動きを抑制しようという動きが世界中で高まり、国連では再生医療と抗老化医療の原則禁止を決議した。その決議は違反国に対しては除名措置も採られるという厳しいものであった。

大仕事を終え緊張が緩和された場合に早紀の耳に聞きなれた声が飛び込んできた。

「よかったじゃん、カッコよかったぜ」

緊張のない声。コーイチだ。

「それ女の子に言う台詞？」

何で男の子ってこうなの？ 私がせっかく晴れの舞台にこんなに着飾っているって言うのに……褒められたのはうれしいけど。

って何考えてるの私！ いつもどおりに振舞えばいい。

「で、私がカッコいいのはよく分かったんだけど。コーイチどうせ理解できなかったでしょ？」

「なにを」

とぼけたような言い方をする。

「論文」

「えつとあれ論文の発表だったのか……てつきり自己紹介とばっかり……」

「延々三十分も自己紹介続ける奴が居るか！ あほう！」

「いや英語苦手だし、分かんないし……」

突然、語尾を切ってコーイチは身構える。

目の前には西洋人の年配の男性。

「Hello. Are you Saki Kanbara?」

「Yes. Please, tell me your name」

日常英会話と専門用語を知ってさえいればコミュニケーションで困ることはない。早紀は多少の海外講演経験から英語の必要性を感じ勉強し始めたわけだが、それが面白かったりして今ではビジネス

レベルの英会話までできるようになっている。

『何かにはまったらそれを極めるまでする』それは残された人生を精一杯楽しむための早紀流の技巧というべきものだ。

「やっぱりスゲーな尊敬する」

「そう？」

早紀はふっふーんと胸をそらせてみる、それにつられて制服のリボンも少し揺れた。

ただに単に褒められることが嬉しい、それだけのことだと思う。大人たちの挨拶のような『すごいね』よりも心の底から『スゲー』と感動してくれているようで嬉しかったのだ。

「このガキと小娘が！ 発表が終わったらちゃんと俺のところへ来いと言ったはずだ」

こつちもまた聞きなれた声が背後から追いかけるように響いてくる。早紀の尊敬する家族以外の唯一の大人、医師の榊だった。

「わかってた」

ふてぶてしく私は答える。

散々、探し回ってくれたらしい榊は若干息を上げていた。スラリとした長身、屈託のない笑み、爽やかな雰囲気醸し出す彼はまさに青年といった風体だが一応れっきとした医師で、しかもやり手だった。

「また倒れたら命の保障は出来んぞ」

「わかってる……」

「ごもつとも。」

「んー、じゃあまた後で会おうね！」

それを聞いて何故か悔しそうな顔をしたコーイチに別れを告げて早紀と榊は歩き出す……。

……夢？ 見たって不思議じゃない、けど忘れていた思い。それに気付かされる。

まだ薄暗い早朝の部室。早紀は覚醒した。

一年前 榊の勤める病院

「ねえ、榊先生。本当は助ける方法とかあるんじゃないですか？！隠さないでくださいよ！！」

僕の怒りは本当は榊に向けられたものでは無かった。

それは病魔に対しての行き場のない怒りだった。

白衣の男はうなだれるしかなかった。

「方法か……一年前までならまだ対処できたかもしれないな」

あくまで無気力な答えに僕はさらに怒りを募らせる。

「それは榊先生の腕が落ちたってことですか！！」

「黙れ！！！」

その声がただ白い無機質な病院の壁を震わせ、病院中に広がるかのような音だった。

僕は後悔した。

そんなことあるわけがない今まで数多くの早紀の手術を担当してきた人だ、一番早紀の命に近いところにある人だ。助けられるものなら助けたいの当たり前だ。それでも助けることが出来ない、そんな自分の無力さに気付いたからこそその諦めに、さらに僕は追い討

ちをかける。

「このバカ医者が……一人の女の子の命さえ救えないで何が先生だ
榊……ひとりの」

言葉にならなかった。

「だま……れ……！ 二年前の国連決議案に日本も賛同しているい
じょう無理なんだ、臓器バンクも二年前に再稼働し始めたばかりで
あの子に回ってくるのもずいぶん先なんだよ！ ちくしょう ち
くしょう ちくしょう」

言葉になっていなかった。

男二人で泣いているのがどんな光景であろうと気にしない。

『あきらめ』

そんな四文字。僕には重く響いていた。

『ガラッ』と車輪が転がり音を立てた。

「なに泣いてんのよ……？ 二人して気持ち悪い……私は後百年は
生きるからね、それで絶対にコーイチのバカ直すんだからね……」
ブルーのパジャマの少女がドアをスライドさせて入ってくる。短
めなその髪、日焼けしていない白い肌、それにつたる一筋の軌跡。

泣いていた。

二人が三人になったって変わらない。

夢？ だったのか？ いつもの暖かい記憶ではなく、悲しみの方の記憶だった。普段からそれを忘れようとしてきたというのに……忘れていた気持ち、一年かけて忘れようとした気持ち、呼び方はこの際かまわないそれをベッドの中で再確認した僕はゆっくりと流る身体を起こした。

伝えたかった気持ちを胸に……

一週間後……

「はよー」

「おはよーにしたら？ なんか間抜けっぽい」

「うるさい、黙れ」

仲が良さそうな二人(?)

今日は土曜日週休二日制そっちのけの出勤。グラウンドからは野球部のかけ声が聞こえてくる、寒い中ご苦労なことだ。

「相坂くん、後輩に聞くのもなんだけど私は信じてしまっているのかしら。早紀のこと」

「僕には判断しかねますが、こういうことは感情のおもむくままに良いんじゃないでしょうか？ 早紀先輩のイメージは僕から見ると優しい先輩で姿はなくても信頼の出来るのですが、三条さんからしてみるとどうなんですか？」

「うーん、早紀って本当にこうだったかしらって思うときもあるの

は確かなんだけど……例えばコウイチに対するあの態度、生前はもつと、『ひゃ』とか『きゃ』とか言うようなこれ以上近づくなつていう距離があつた気がするんだよね」

気のせいかもしれないけどと小さい声で三条さんは付け足した。僕、つまり相坂誠にとつては会つたこともない人物で尊敬する偉人の一人にリストアップされる神原早紀さん。雑誌や新聞などのロングインタビューなどは欠かさず切り抜くほどだった。それが中学二年生のとき、早紀さんが来年度T高校に入学すると聞いたときは驚いた。世間一般では高校を飛ばして大学に行けば良いじゃないかという声も根強かつたが、僕はそこに驚いたのではなくそこが地元だったことに驚いた。元々この県出身とは聞いていたがこの辺りにすんでいるとは。

そして、僕はテニス部を辞めた、プログラミングを基礎から学ぶためだ。中学入学から一年間だったが楽しかったし、やめるのは辛かった。けど、T高校に入つて会つてみたい、一緒に仕事をしてみたいという気持ちがそれに勝った。

難しいランクに分類されるT高校だったが、十二月の模試では合格圏を申告されていた。それを励みに楽しくも無い勉強を続ける寒い冬。気晴らしにテレビをつけてみる。

今日、午前零時次世代コンピューターの基礎理論の提唱、ロボット工学三原則の第四条などで知られる。神原早紀さんが心不全で亡くなりました。十七歳でした。

T高校やめようかな……ハハ。いきなりすぎる凶報。

葬儀の様子がテレビ画面に映し出される。人、人、人。世界各国の技術者たちがさも悲しそうな顔をしている、どうせ自分のことしか考えてないくせに。わざとらしく泣くクラスメイト、出る杭が無

くなつたと喜んでいくせに。近所のおばちゃん、安っぽいドラマでもこつやつて泣くのだらうな。

！

テロップがT高校技術部と変わる。その瞬間この人たちは違うと思った、家族だと思った、何より身内以上だと思った。

「神原早紀さんのどういったところがすきでしたか？」

「生前に何か言い残したことは？」

「次世代コンピューターの開発は誰が引き継ぐんですか？」

「今後の早紀さんの特許の運用は皆さんに任せるとの遺言ですが特許権の売却の可能性は」

矢継ぎ早の質問に泣きじゃくった女子部員が答えるかに思われたが、

「だまれだまれだまれ！！ サキはサキでした。僕の幼馴染みにして
でした。ただそれだけです！」

がやがやがうるさくて幼馴染みにしてなんなのかは聞こえなかったが本心からの心の叫びは誠の胸にも響いてきた。

テロップが『悲しみに暮れる幼馴染み』と変わる。違うそうじゃない。

あくまで男子部員は泣くこともせずただ怒ったのだ、それは涙を見せるのを必死にこらえているようでさえあり。そして、幼馴染みという枠に囚われることのない深い感情をみせていた。

「そうか、……」

僕はT高校に行くことを決めた。

「ねー、相坂くん。三条さんにこれ見てもらって。何力所かちつちやなミスだけとあるから」

ハッとする。まさか、早紀さんにレクチャーを受ける日が来るな

んて。がんばったかいもあったというものだ。

「三条さ〜ん、よろしく〜」

「はい、はい」

直接教えてくれないのは残念だが。

「三条さ〜ん、よろしく〜」

親友の声にハツとし、ぼんやりした脳に活動の指令を送る。一年のブランクから未だに抜け出せていないあたし、幻聴ではないことを確かめる必要もなくなったことに喜びを覚える。

言ったら、言いつばなしなのは早紀の悪い癖だが仕方がない。

そのあと、ずっと黙っているが何をしているのかは分かる気がする。きっと、幼馴染みの後ろ姿を飽きもせずずっと見つめているのだろう。

そんな早紀にあたしが出会ったのは小学生の時だった。

体育の授業のときあたしはたまたま調子が悪く、いつも見学してパソコンで意味の分からない文字を延々と打ち続ける子と二人つきりになった。

木漏れ日の漏れる木陰。

あたしは沈黙に耐えきれなくなり、先に口を開いた。

「えっと、神原さん。それ、何？」

やっと、画面から顔をあげる。

「おしゃべり」

「パソコンと？」

「うん」

さも不思議ではなさそうな顔。残念ながらあたしには分からない、ただの文字が並んでいるだけだ。

それっきり、画面を向いたままでこっちは目もくれなかったが、それでも時々画面から顔をあげたりして、今日の授業サッカーをしている男子の中の一人を見つめる。

「好きな子？」

我ながらストレートな質問だと思う。

「ううん、違う。友達」

「ふん」

なにかはぐらかされたような感じがする。

『友達』『ともだち』『トモダチ』こんな言葉はその関係に対する総称的な名称に過ぎない。例えそれが『大切な人』だとしてもあたしは『友達』と答える、気恥ずかしさや見栄がそう答えることを拒否する。残念ながらまだ、あたしはそんな人には出会ったことはない。

なおもキーボードに走らせる指はスピードを落とさず、叩き続ける。

カタカタと静かに規則的に耳へ抜ける音を子守唄に、きらめく木漏れ日をモバイルにあたしの意識はフェードアウトしていく……

その後、あたしが気が付いたのは下校時間から一時間くらいたった放課後の保健室だった。

傍らには神原さん……体育の時間と変わらない調子でキーを叩き続けている。

「あつ、気が付いた？　すぐ先生呼んでくるね。体育の時間が終わってもずっと眠り続けてるんだもん、もしかして三条さん眠り姫？！」

興味津々である。

このままもし自分が眠り姫だとか言ったら信じてしまうのではないかと思うほど、純真な問いに参ってしまう。

「神原さんこそ何でこんなところに？」

放課後誰もいなくなつた小学校はただ静かで下校時間から随分過

ぎたことがわかる。

黄昏る日の光は人の気持ちを不安定にさせる。その安定剤のごとく神原はたたずむ。

「家は両親が忙しいから迎えに来れないの、だから先生の車に乗るためにいつも保健室で待ってるの」

悲しげな表情も見せず、ただ事実を受け入れている。あたしだったら絶対に愚痴をこぼしていたところだ。

「迎えに来るって神原さんどこか悪かったけ？ いつも体育は見学してるけど……」

「……………」

まずい、初対面の人に身体のことを聞くのは失礼だとお母さんからも教わっていたし。特に、相手が本当にそうであると思うのなら尚更だ。

「……気にしないでって言いたいところだけど……」

気まずい雰囲気を作ってしまった自分を呪う。

「あつ、えっと、いや、忘れて。ゴメンね、こんなこと聞いて」

「いいって、結局知っておかないと困るし、私に出来ないこともたくさんあるから……」

そして、あたしは教えてもらった。早紀の病気は小学生の自分なりに考え大変な病気だという概念で認識した。

「シンゾービョーっか……」

ほぼ初対面のあたしにそこまで教えてくれた早紀に理由を尋ねてみる。

「私、決めてるの！ 精一杯生きようって、死んじゃうときにやりのこしたことが無いようにって」

決意。儚く強く生きること誓った少女。

「だから、友達になろっ！ 私は神原早紀だから早紀って呼んで」

「あ…… あたしは三条弥生……どんな風に呼んでもいい」

「じゃあ、三ちゃん」

「ダメ！」

「条ちゃん？」

「もつとダメー!!」

「じゃあ、『三条さん』。なんか私のお姉さんっぽいし」

「他に無いの？ 弥生とか」

「好きに呼んでいいって言うてたから私は三条さんって呼ぶことにする」

お姉さんか……いつちょ頼られてみるか。

「はい、はい」

後輩を任されるとは今でも頼られてるのかな？ 早紀。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

見つめているだけ。

ただ見つめているだけ。

声は出せるし、声も聞こえる。

でも自分から声をかけないとただ見ているだけ。

生前一度もコーイチに触れたことが無かった。

ただの一度も。

長くそばに居るとなかなかそんな踏ん切りがつかなくなってしまう。

なんとなくタブーのような感情が生まれ無意味な一人我慢比べをしていた。

それを今猛烈に後悔している。

どうか最後にもう一度……………

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「うえ、なんだコリヤ。人の食う食べ物か？」

机の上に載ったラーメン、その下にはよく言えばリゾット風になった米が、現状を忠実に再現するとしたらねこまんまに味噌汁の代わりにラーメンをぶち込んだような代物といった体だ。

「なにか言った???」

あくまで僕の訴えは聞かないつもりらしい。

元はといえば昼飯に何か食べようとか言ってサキに作らせたのが運の尽きで、そこに米とラーメンがあつたことが事態を悪化させた。

『何か、作ろうと思うから。調理器と材料頂戴』

『調理器はあるが、材料なんてねーぞ家庭部じゃあるまいし』

『あるじゃない、ここに』

そこには僕の昼食となるはずの即席ラーメンの袋、そして誠の分の白飯。

悪寒そして絶望。

僕たちの昼食よ、キミたちの未来はもう終わった！！

……そしてこの結果である。

てつきり調理中は鶴の恩返しのごとく出て行くように言われるものとはかり思っていたが、そんなこともせず。いきなり調理器の電源が付き、鍋は宙を飛び、間違えて取り出したらしいフライパンは慌てて元の場所に戻っていった。

後のポルターガイスト現象である。

できた〜

それは今世紀最大の災厄が舞い降りた瞬間だった……

「食べないの？ 私食べれないからコーイチと相坂君で食べてね」

「えーと、三条さんは？」

「弁当あるから、あたしはパス。良かったね早紀の手料理食べられて」

[illegible]

「生きてるか？」

「ええ、何とか」

目の前には空になったラーメン丼。我々の勇気の証として語り継がれてもいいだろう、僕が許可する。

實際、僕がサキの料理を食べたのは初めてでない。それは中学一年のとき僕の両親が二人して旅行に行っていたときだった。親の居ないときに女の子を家に上げるのもどうかと思つたが、それは一瞬の躊躇に過ぎなかつた。腹が減つていたそれだけだ。そのときから何の進歩も無いのはサキらしいといえばサキらしい。

感想を言っておこう、豪勢な昼食だった。

昼食（？）を食べて一段落したところ。事態は起こった。

「コイチ、外に出よう！」

「外って、出れないだろお前」

「ダイジョーブ」

その確信はどこから、すつとんきよな頭の中に広がる小宇宙からか？

「違うって」

モノローグを読むなよ！

「だって読めるもん」

だーからー、読むなつて。

「残念だけど、努力する……」

「努力目標かよ！……まあいい、それでだな外ってどうやって出るんだ」

「これ！」

と同時に校庭から上がる声。

「うわっ、なんだありゃ」

「クルーザーだろ」

「こっち来るって」

「だーれだー、こんなもの学校に持ちこん のふあ」

阿鼻叫喚。少し早い春の嵐が来たようだ。

「あのクルーザー僕のだよな」

「うん！」

「うん、じゃねーよ。人の船勝手に持ち出すな」

「パスワード短すぎるよ、アルファベット四文字だったら解析は一瞬で済んじゃう」

うわっ、恥ずかし。あのパスは

「さあさあ、行った行った」

「け……警察だ、警察を呼べ。誰だ、こんな物もってきた奴は。無期限謹慎処分だ！」

あーヤバい。僕は警察を呼ばれる前にとつと逃げることにした。

「で、だな」

「へえ、何でございましょう？ 旦那」

「知ってるか？ こういう船っていうのは本体の値段より燃料のほうが高いんだぞ」

眼前に広がる、全てを飲み込む黒。そして、青い球体。

「大気圏を出なくても良かったよな」

「だってどこでもいいから遠くへ逃げろって言ってたし」
太陽系を出なかっただけよしとしよう。

「聞かれたくないし、他の人に……」

蚊の羽音だつてこれより大きいのではないかと思うほど、小さな声。静寂に包まれた真つ白な船内に拡散する。

「水素60・3パーセント、酸素25・5パーセント、炭素10・5パーセント、窒素2・4パーセント、リン0・1パーセント、硫黄、0・1パーセント。その他、微量元素、極微量元素も同様。合成モード、有機物。モデル、ピクチャー203。作成開始」

何だつてんだ？ 物質合成装置が唸りをあげる。

「うるさい、電気消せ！ 3……2……1……」

強引に船内全ての照明が落とされる。

（照明どこだったけ）

手探りで探すも慣れない船室には戸惑うばかり。

（あつた）

カチッ……………あつ、いやゴメン……………カチッ

一瞬、船室に現れた白い物体。それを服飾の合成途中のサキと認識できたのは3秒くらいたつてからのことだった。

「なにやってんの？！ このあほう！！」

「ゴメンって」

真つ暗な中、さっきの方向へ怒鳴り返す。なぜか白い人型が暗闇に残像として残っているのはきつと気のせいだ。

太陽が地球から昇ると、小窓からの光がスポットライトのように一人の少女を注目させる。

「！」

一年前の彼女の姿が浮かび上がった。あくまで白い肌、短めな髪、ブルーのパジャマ。思い出したいくない思い出がよみがえる。もう、一生あんな思いはしたくない。でも、もう一度会いたい。

良かった。

つかつかと歩み寄られ、対峙する。顔の高さまで手が上げられ僕は平手が来るだろうと眼を閉じた。

予想に反して。そっと、頬に触れられる手。

その温もりを確かめるようにずっと触れ続ける。

「やっと」

「？」

「やっと、触れた」

常とは違う態度に呆然とする。

えーっと、このまま接吻までいけばよろしいのだろうか。

「ばか……！」

読まれていたようだ。頬に触れている手で頬をつねられた。

「いってー」

「当然でしょ、阿呆のコーイチ。不純な妄想には鉄槌！　これ基本ね」

「ちえっ」

「こんなことしていいのか、お前の唱えたロボット工学の追記に抵触してる気がするのだが」

「お上が知らなかったらいいの」

「随分な物言いだな」

「言いだしつぺは私だもん、罰は私が決めるわ。人に決められたり、不可抗力で消えるのはいやなもの。これを後の判例とすること」

「罰？」

「うん、罰。自身の 消去デリート。」

「また、いなくなるのか……今度は永遠に」

船内に赤色灯がつき、ロボット工学四原則についての違反を語っている。

「永遠？ 分かんないよ。 気が付いたら別の姿でそばに居るかも」

「そうかい」

「んん？ なんか素っ気無い。 てつきり号泣するかと思ってたのに」

「馬鹿野郎」

心は泣いていると言ったら笑われるのだろうか？

僕の唇に認識されるやわらかく温かいその感触は一生忘れないつもりだ。

煌く粉一粒一粒が光りながら消えていく。演出としては妥当だな。

「バイイ、しばしの別れを」

「ああ、そうだな」

最後に猛烈な粉塵が巻き起こり、それが消えたところにはサキの姿は雲散霧消していた。

（しばしの別れを……か）

おとなしくなった赤色灯がその存在の消失を確認させた。

後日談になるがその後僕は見事に謹慎を受けた。とは言ってもすっからかんになった財布を潤すため仕事があったところだったので特に問題は無い。

たった一週間ぐらいのことだったけどそれがとても長い夢に感じられるようになるのはいつのことになるだろう。
スクランブル交差点の雑踏の中しばし考える。

（あほうのコーイチ！）

風に乗せられたのだろう。
きつとそうだろうよ。

(後書き)

むむむ。

今からしてみてもビミョイで、また大改稿してお届けします。

これまた裸研企画の作品

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5098m/>

ALONE ～とある少女の話～

2010年10月8日14時21分発行